



AMCO

CaseReport

Specialists in the importing and marketing of USA and European medical and scientific products in Japan.

2014.04

18

リポーザブル製品を使用した手術の質の維持とコスト削減

北里大学 北里研究所病院 中央手術センター

椿 貴年 師長

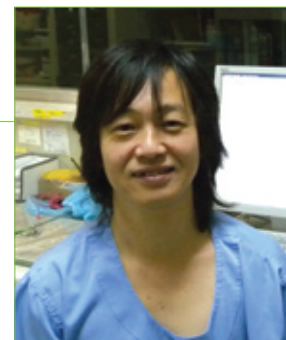
1983年 東京電子専門学校 医用電子工学卒。

コンピューター・プログラマーを経て、1989年 北里看護学校卒業。

北里研究所病院にて内科系・外科系病棟勤務後、2000年 中央手術センターに配属。

師長業務のかたわら手術支援システム・医療安全システムを開発。

現在、北里大学北里研究所病院 看護師長、日本看護協会 災害支援ナース、メディカ出版のナースングビジネス等の雑誌記事執筆。



医学の進歩、特にここ10年間は、非常に早く変遷しているような気がします。特に、手術に関する手技等はその変遷が大きいといえます。私がスタッフとして手術についていた十数年ほど前の外科系の手術の多くは、まだまだ開腹手術等が多く、内視鏡的な手術といえば整形外科の一部と外科の腹腔鏡下胆嚢摘出術ぐらいのものでした。その割合は9:1程でしたが、ここ十数年のうちに、内視鏡的な手術とそうでないものとの割合が逆転する勢いとなっています。この背景には、手術手技の進歩や手術に関連する様々な製品等が開発され、手術を受ける患者にとって侵襲の少ない内視鏡的手術が広く一般的になってきたといえます。いまや開腹手術と聞くと、手術予定の患者の中にはセカンドオピニオンを選択してしまう患者もいる時代になってきており、今後も侵襲の少ない手術を患者が望み、病院を選択して受診するという構図は変わらないと思われます。

十数年前は、開腹手術で使う手術器械は鋼製のもの、ペアン、コッヘル、ケリー、剪刀などが多く、滅菌コンテナに入れオートクレーブで滅菌できるものが主体で、針糸や吻合器といった一部のものがディスポーザブル製品でした。その当時はあまり材料に関心がなかったというもあり、ディスポーザブル製品を使用することで、手術のコストが大きく変わるということも理解をしていませんでした。また、当時にもリポーザブル製品もありましたが、前述したように鋼製の物であったため、重量があり使い勝手も悪く、次第に使われなくなっていき、製品自体が軽く扱いやすいという点から、ディスポーザブル製品が主体となっていきました。

師長となり手術室の運営・管理を任される立場になり、手術にかかる費用というものを考えるようになりました。償還価格のある製品やそうでない製品が手術には多く使われています。特に償還価格のないものは、ただ単に病院からの持ち出しになり、せっかく手術を行っても、手術代金から差し引かれてしまうという点に気がきました。SPDが手術材料に価格の入ったシールから、内視鏡手術に使われているトロッカー類は、『お金が戻ってこない』ということに気がきました。必ず使うもののなのに



リポーザブルトロカール&カニューレ イエローポート プラスを使用している術中風景